

江戸時代初期における私札の発展*

——伊勢国射和地方で発行された富山札を中心として——

鹿 野 嘉 昭

1 は じ め に

わが国においては、室町時代末期から江戸時代初期にかけて約60年の間、有力商人が単独もしくは共同で、時には領主権力からの承認を得て発行した「私札」と呼ばれる紙幣が地域的な交換手段として流通していた。江戸時代後期の天保期以降においても公卿、有力社寺が私札を発行していたため、これらとの峻別を目的として、初期私札は、その発行・流通地域が伊勢国、大和国、摂津国など近畿地方に集中していたことにちなんで「畿内古紙幣」と呼ばれる。畿内古紙幣の最も代表的なものとしては、伊勢山田地方で発行された山田羽書^{はがき}が挙げられる。この山田羽書がわが国における紙幣の源流であると同時に、寛文期（1661～73）以降発行が増大していった藩札の原型（プロトタイプ）であるとされるのが一般的となっている。

本稿は、この畿内古紙幣に関する既往研究成果を踏まえつつ、それが発行されるに至った背景、発行状況および流通実態について改めて検討しようとするものである。そして、① 初期私札は、室町時代後期からの撰^{えり}銭^{ぜに}という貨幣選別行動の高まりに伴う銭貨流通の混乱のなかで生じた地域的な通貨不足あるい

* 本稿は、日本銀行が1997年1月7日に開催した金融研究会に提出された山口健次郎と共同で著した論文を当日の研究会での議論や諸先生方との意見交換を踏まえて修正したものである。本来であれば、山口との共同論文とすべきであったが、同氏が実業界に転じたこともあって、同氏の了解を得たうえで単著として公表することとした。なお、本稿の作成に際しては、神木哲男（中京大学教授）、郡司勇夫（日本貨幣協会名誉会長）、作道洋太郎（大阪大学名誉教授）、新保 博（神戸大学名誉教授）の諸先生方からとくに有益なコメントをえたことを記して感謝したい。

は小額貨幣不足への対応措置として考案された、② ほとんどの場合、私札は商品の仕入れ資金あるいは賃金の支払手段として有力商人等により発行された、③ 発行元となった商人の信用度がきわめて高かったため、私札の多くは、償還(兌換)されるまでの間、銭貨に代わる地域的な小額の交換手段として広く利用されていた可能性は否定できない、と主張される。

この間、中世において発展をみた割符^{さいふ}に代表される手形類との比較で私札を捉えると、私札の場合、中世の手形類が貨幣価値の受け渡しを記した一般文書であったのに対し、貨幣価値の受け渡し手段としての機能に特化すべく様式の定型化・券面金額の定額化が図られたところに、わが国貨幣史上の意義が見いだされる。私札は当初、山田羽書に代表されるように、神仏の宗教的権威により貨幣としての通用力が支えられていたが、いわゆる「経済社会の成立」(速水・宮本〔1988〕)の成立とともに、宗教的権威に頼らなくても一般受容性をもった交換手段として私札が広く通用するようになった。そして、このような私札の交換手段としての一般化が、その後における藩札の原型となったとされる。そうした意味で、私札は、撰銭や地域的な通貨不足への対応措置として自律的に登場した交換手段にとどまらず、中世における信用取引と近世における札遣いとの間に位置する結節点でもあり、私札のわが国貨幣史上の意義や役割について改めて見直す必要があるといえよう。

以下、第2節では、これまでの私札研究を展望するとともにその研究成果に基づき、畿内古紙幣の発行・流通状況を概観するとともに畿内古紙幣が発行されるに至ったマクロ経済的な背景を検討する。第3節では、伊勢国射和地方で発行された射和札のうち文献資料が残っている富山札を取りあげ、事例研究的に私札の発行・流通状況を検討する。最後に第4節は、本稿での議論を要約するとともに、今後の研究課題を提示することにしたい。

2 私札発行をどのように捉えるか

(1) 私札研究の展望とこれまでの研究成果

（私札研究の展望）

私札をめぐるのは、古くは郡史あるいは郷土史というかたちで戦前期より広く研究されているが、私札が本格的な歴史研究の対象とされたのは第2次世界大戦後以降のことである。そうした研究成果を取りまとめた文献としては、作道洋太郎氏の『近世日本貨幣史』〔1958〕、荒木豊三郎氏の『私札』〔1959〕、日本銀行調査局『図録日本の貨幣2：近世幣制の成立』〔1973〕、妹尾守雄氏の「藩札と私札の経済史的意義」〔1975〕などが挙げられる。作道氏は『近世日本貨幣史』において、私札を藩札に代表される近世信用貨幣の原型（プロトタイプ）をなすものとして捉え、寛文期（1661～73）までに近畿地方においてみられた私札から藩札への転化・一般化が江戸時代における札遣いの先駆けとなったと論じている。荒木氏の『私札』は、江戸時代から明治時代にかけて発行された私札を対象として、個々の私札ごとにその発行形態、発行者、発行年、額面金額を一覧形式でとりまとめた私札の百科事典とでもいうべきものであり、現在では私札研究に際しての基本文献となっている。日本銀行調査局の『図録2』〔1973〕および妹尾〔1975〕は、これらの先行業績を集大成したものであり、作道氏の立論を踏襲のうえ初期私札を藩札のプロトタイプとみなし、江戸時代における信用貨幣あるいは「札遣い」の生成・発展のなかで私札を捉えて議論するところに特色がある。

また、私札研究において研究者の関心を最も集めたのは、伊勢山田地方で発行された山田羽書であった。山田羽書に関しては、豊富な文献資料に支えられ、日本銀行調査局『図録日本の貨幣6：近世信用貨幣の発達(2)』〔1975〕や同「わが国紙幣制度の源流について」〔1980〕などに代表されるように、多くの研究成果が報告されている。そして現在では、山田羽書は、① 御師と呼ばれる伊勢神宮に仕える有力商人により、その高い信用力と宗教的権威を背景に、

伊勢地方独特の地域的な小額貨幣不足¹⁾への対応措置として考案された交換手段であり、② 徳川幕府による庇護の下で江戸時代300年近くの間、間断なく発行され続けたところにその特徴がある、と一般に理解されている。

もっとも、その他の私札に関しては、文献および現物資料面での制約もあって、多くの場合、発行者・金額等の整理や現物の形態面からみた特徴の指摘にとどまり、私札の発行・流通実態に関しては必ずしも明らかにされていない。また、なぜ私札が16世紀末から17世紀前半にかけて近畿地方の伊勢山田、大和下市、摂津平野郷などといった特定の地域において発行されるに至ったのかという問題に関するマクロ経済的な吟味も、これまでのところ、さほど活発には行われていない。それゆえ、本稿では、畿内古紙幣の発行状況に関する既往研究成果を簡単に振り返った後、初期私札が発行されるに至った経緯を検討することにした。

(畿内古紙幣に関する研究の展望)

中世以来の先進経済地帯であった近畿地方においては、近世初頭から各地の商業中心地で初期私札あるいは畿内古紙幣の発行がみられた。この畿内古紙幣は、発行・流通地域を基準として伊勢系統私札、大和系統私札および摂津・河内・和泉系統私札に大別される。第1表は、『図録 日本の貨幣2』[1973]や妹尾[1975]に基づき、これら初期私札の発行状況等を取りまとめたものであり、この表を敷衍するかたちで畿内古紙幣に関する既往研究成果を簡単に概観しよう。

最初に、伊勢系統私札の場合、伊勢外宮の神職を兼ねる有力商人、山田御師によって発行された商業手形から紙幣へと自然発生的に発展した山田羽書を嚆矢として、その後、宇治、射和、^{いさわ}松坂、^{じゅう}丹生などの山田近隣地域においても山田羽書を範として私札が発行されたというのが通説となっている。山田羽書は当初、小額貨幣不足への対応措置として山田御師により個別に発行されていた

1) 伊勢山田地方の場合、毎年多数の人々が伊勢参宮に詣でることを主因として、小額貨幣に対する需要がきわめて高かったことから、金銀貨という高額貨幣が発行された江戸時代に入ると恒常的に小額銭貨が不足していた。

が、その後、発行体制が漸次整備され、元和期（1615～24）ごろまでに羽書の形態・様式・発行方法も整ったようである。そして、寛永8年（1631）ごろからは三方会合所という山田御師の自治的行政組織を通じて発行される一方、徳川幕府は山田奉行を媒介として羽書の発行を監視するようになった。その他の伊勢系統私札は、各地の商業取引ニーズに基づき発行されたが、幕府貨幣の浸透に伴う良質貨幣に対する需給の緩和や徳川幕府による私札発行に対する取り締まりの強化に軌を一にするかたちで17世紀後半にはほとんど姿を消した。

大和系統私札の場合、吉野地方北部の山間部と平野部の間に位置する大和下市で発行された下市銀札が有名である。下市は中世以来の交易の中心地であり、銭貨の持ち運びに付随する不便を解消するための手段として、同地の富豪が銀目を紙に記載のうえ「切手」と称して発行したのが下市銀札の始まりとされる。その後、数名の富豪が連名で切手を発行するようになり（これを組合札という）、寛永13年（1636）には幕府から切手発行にかかわる公許をえた。この徳川幕府の公許とともに組合札は御免銀札と呼ばれるようになるとともに、十分な発行準備に支えられ、幕末までの間流通していた。

一方、摂津・河内・和泉系統の私札としては種々のものが発行されている。このうち大坂江戸堀河銀札は元和元年（1615）、豊臣氏滅亡後の大坂区画整理事業の一環として実施された江戸堀河の開削工事における人足費用の支払手段として、桔梗屋伍郎左衛門および紀伊國屋藤左衛門の連帯責任で発行された。また、夕雲^{せきうんぴらき}開銀札は、堺の富豪筒井庄右衛門（木地屋）により、堺東郊の^{もず}百舌鳥村での新田開発に際し、食糧費用や労賃の支払手段として発行された。これらの私札は江戸時代後期から明治初期にかけて鉱山等の事業経営者により被使用人に対する日雇労賃の支払手段として発行された労賃札²⁾の先駆的な形態であるといえる。このほか、当時の近畿地方においては京都、伏見と並

2) 労賃札は、事業経営者が管轄する作業区域内に設けられた各種の店舗においてのみ交換手段として通用し、通用区域外で貨幣として使用する際には正金銀との交換が必要とされた。このため、労賃札は、事業経営者からみると、交換手段にとどまらず、労賃の再吸収手段あるいは被使用人の労務管理手段としても機能していたといえる。

第 1 表 江戸時代初期に発

		発行地	発行開始年	発行主体
伊勢 統系	山田羽書	伊勢国山田 (伊勢神宮 外宮領)	室町末期～慶長年間 (1600年前後)	山田三方会合 —当初は御師と呼ばれる神職を兼ねた有力 商人により発行されたが、その後山田三方 会合という御師の自治的な行政組織が発行 者となる。 —慶長 8 年 (1603) 幕府公認となり、寛永 8 年 (1631) 以降は幕府・山田奉行の監視 下におかれた。
	宇治羽書	伊勢国宇治 (伊勢神宮 内宮領)	慶長～元和年間 (1596～1624)	宇治年寄会合 —自治的行政組織、慶長 8 年 (1603) 幕府 公認となる。寛永 8 年 (1631) より幕府・ 山田奉行の監視下におかれた。
	いさわ 射和羽書	伊勢国南勢 射和地方 (鳥羽藩領)	元和年間 (1615～1624)	札野・富山・中嶋・布屋という有力四家が 発行
	札野札	射和地方	寛永元年 (1624)	札野宗次兵衛・札野幸左衛門
	とみやま 富山札	射和地方	寛永元年 (1624)	富山長左衛門 (定次)
	中嶋札	射和地方	元和年間 (1615～1624)	中嶋久兵衛
	布屋札	射和地方	元和年間 (1615～1624)	布屋武衛門
	松坂羽書	伊勢国南勢 松坂地方 (紀州藩領)	17世紀前半	鳥谷・神戸・寺西の三家が発行
	はかりや札	松坂地方	寛永10年 (1633)	鳥谷 (はかりや) 九兵衛
	下の蔵 (倉) 札	松坂地方	寛永10年 (1633)	神戸 (下の倉) 浄意
	雲出倉 (蔵) 札	松坂地方	正保 3 年 (1646)	寺西 (雲出倉) 七郎左衛門
	じゅう 丹生羽書	伊勢国南勢 丹生村	寛永年間 (1624～1644)	長井 (梅屋) 宗右衛門・長井 (梅屋) 善兵 衛

行された「初期私札」一覧

額面・種類	発行方法等	特徴および流通状況
銀一匁・七分・五分・三分・二分の5種類	銀の預り証として発達し、丁銀（当初は銀）を発行準備とする銀兌換札として発行	わが国最古の紙幣といわれる。山田商人の高い経済的信用力および伊勢神宮の神祕的權威を背景に、小額貨幣として山田のほか近隣地方においても広く流通していた。 山田地方は、伊勢神宮（外宮）の神領であり、宝永4年（1707）の全国札遣い停止令の際にも特例として紙幣発行が認められた。山田羽書は、幕令により発行体制を整備しつつ明治4年の廃藩置県まで継続的に発行された。
現存しているものは五分・壹匁の2種類	発行方法を詳細に記録した資料は現存していないが、山田羽書になったと考えられる。	現存する宇治羽書は非常に少なく「丁銀五分請取」札（1610年代発行、発行者：梅屋彦兵衛・昆布屋権七）、「丁銀壹匁預」札（寛永期以降発行、発行者：宇治組〈9名連帯〉に属する商人）がある程度。 山田羽書とは異なり、宝永4年（1707）の札遣い停止令、享保15年（1730）の札遣い再開のいずれにおいても発行許可を願い出なかったため、18世紀初頭以降、宇治羽書の発行が途絶えた。
以下のとおり	丁銀を支払準備とする銀兌換札として発行	射和地方（飯南郡）は松坂と並ぶ南勢地方の経済的枢要地で、特産物の水銀製「輕粉」（伊勢おしろい）の製造や、呉服行商等を背景として近世初頭には17軒の富豪を輩出した。 そのうち有力富豪四家が、その信用力に基づき私札を発行。
銀一匁・八分・七分・五分・三分預の5種類		
銀二匁・一匁・九分・八分・七分・六分・五分・四分・三分・二分預の10種類		富山家（屋号「大黒屋」）は、16世紀末から江戸での呉服商経営により財をなした富豪であり、江戸では両替商も兼業していた。享保10年（1725）、幕府御為替十人組の一人になって公金を取り扱ったとされている。
銀一匁預		
銀七分預		
以下のとおり	単独発行・個々引請から、単独発行・3商人連帯保証に移行	伊勢・松坂は織豊政権期の天正年間（1573～1592）ごろから商業都市として発達し、その後は伊勢商人の中心地となる。 松坂出身の豪商としては、三井（江戸・京の両替商・呉服商）、殿村（大坂十人両替・屋号は米屋）などが有名。
銀一匁・八分・四分・一分の4種類		
銀一匁・五分預の2種類		
銀一匁・八分・六分預の3種類		
銀一匁・二分預の2種類		丹生は古来から伊勢水銀の産地で、射和とともに「輕粉」製造および商業の拠点のひとつ。寛永年間には町勢盛んで商家・長井家が私札を発行していたが、17世紀半ばに水銀産出が途絶えるとともに、丹生も衰微の途をたどった。

		発行地	発行開始年	発行主体
伊勢系統	北勢諸羽書	伊勢国北勢地方	寛永～正保年間 (1624～1648)	紺田・長島屋・高田倉の3家が発行
	<small>ちやうま</small> 中万羽書	北勢中万村 (津藩領)	寛永年間初期 (1620年代)	紺田与四郎(中万村在)
	白子羽書	北勢白子地方 (紀州藩領)	正保2年(1645)ごろ	長島屋兵右衛門
	一身田羽書	北勢一身田村 (高田本山領)	正保2年(1645)	高田倉八郎右衛門(順道)
大和系統	大和下市銀札	吉野下市およびその周辺	組合札：元和年間 (1615～1624) 御免銀札：寛永13年 (1636) 幕府公許	組合札：数名の富豪 御免銀札：幕府が選出した下市在住の富豪 30名
	大和今井町銀札	中和・今井町および近隣地方 (郡山藩領)	寛永11年(1634)	小物屋(今西)長兵衛・壺屋(上田)忠右衛門・細井戸屋与兵衛・八木屋与左衛門・成屋次兵衛・塩屋(尾崎)源兵衛 一郡山城主が発行を許可
摂津・和泉・河内系統	大坂江戸堀河銀札	大坂区画整理地区	元和3年(1617)	桔梗屋伍郎左衛門・紀伊國屋藤左衛門
	<small>せきうあんぴらぎ</small> 夕雲開銀札 (木地屋札)	和泉国堺と周辺地域	元和8年(1622)	木地屋(筒井)庄右衛門
	平野郷銀札	摂津国住吉郡平野郷	元和期もしくは正保期 (17世紀前・中期)	
	市郎兵衛札	平野郷	元和期(1615～1624) もしくは承応期(1652～1655)	市郎兵衛
	<small>のきわぐみ</small> 野際与札	平野郷	正保3年(1646)	分銅屋小右衛門・山下吉兵衛・常屋徳左衛門・稻荷屋市兵衛・窪倉源左衛門・伊勢屋権之丞・藤井喜三郎
	<small>のよぐみ</small> 野堂与札	平野郷	享保16年(1731)	奥野清順など

額面・種類	発行方法等	特徴および流通状況
次のとおり		発行時期が寛永期以降となっていることから、南勢諸地域（宇治山田、松坂、射和など）の羽書発行にならったものと考えられる。
銀一匁・八分・七分・六分・五分・四分・三分・二分預の8種類		
銀二分預	白子町本町在の富豪数名による共同連帯責任で引き請ける	
銀一匁預	一身田・高田本山（寺）の許可に基づき高田倉が単独責任で発行	
組合札：銀目で大口から小口まで種々の額面金額がある 御免銀札：同上	組合札：不渡り防止のため数名の富豪が連名で発行 御免銀札：富豪30名を地域別に3組に分け、兌換準備として札1貫目につき抵当3貫目を差入れて発行された。不渡りの際は組合が引責。	下市は山間と吉野川流域の平坦部の境に位置する商業の中心。中世から交易が盛んで六斎市が立った。中世以来、下市の有力富豪が銭貨の運搬コストを削減するため、銀建ての「切手」を発行しており、このような伝統のうえに立って、「下市銀札」が発行された。江戸・元和期に整備された「組合札」と呼ばれる銀札発行制度は幾度かの改変を経て、幕末まで存続した。
銀一匁・五分	十分な兌換準備の保有が義務づけられていた。	今井町銀札発行の許可を出した郡山藩主・松平忠明は、郡山移封前の大坂城代時代に大坂江戸堀河銀札発行に関与しており、今井町銀札はこの折りの経験が影響している可能性がある。 宝永4年（1707）の札違い停止令とともに発行が途絶えたが、それに際し、正貨引き替えがきわめて円滑に行われたことが知られている。
銀一匁または七分	札元2名の連帯責任により発行	江戸堀河改削工事に際しての足費用支払手段として発行された。
銀一匁・五分・三分・二分		堺郊外百舌鳥村に新田を開発するに際しての食糧・足費用の支払手段として発行された。大坂江戸堀河銀札をならったものと考えられる。「夕雲開銀札」という名称は、本地屋当主・筒井庄右衛門が、大坂の代官であった高西夕雲と昵懇の間柄であり、それにちなんで開墾中の新田を命名したことに基づくといわれる。
		平野郷は、江戸時代初期にあって、京（伏見）や堺とともに、畿内商業の中心地として栄えた。ここから区画整地された大坂などに多数の商業資本が流入していった。
銀一匁・六分		市郎兵衛という人物についての詳細は不明ながら、江戸時代初期、平野郷で活躍した商人と考えられる。
銀一匁	札元7名の連名による発行	野際与札は宝永2年（1705）、札元43名によって計117貫匁が発行されていたという記事がある。

ぶ商業の中心地であった摂津国平野郷では元和から正保期（1615～48）にかけて、伊勢山田地方や大和下市におけるのと同様に、折からの通貨不足あるいは小額貨幣不足の解消を目的として市郎兵衛札や野際与^{のぎわぐみ}札など、有力商人による私札の発行が相次いだ。

(2) 初期私札の特徴とその経済史的意義

（初期私札の特徴）

以上の説明からも明らかなように、初期私札の発行主体は富豪と称される地域の有力商人であり、私札の交換手段としての一般受容性や銀貨もしくは銭貨との兌換性は、彼らの卓越した経済的信用力により支えられていた。そして、第1表で整理・要約された初期私札の発行状況を鳥瞰すると、上記のような一般的な性格に加え、次の4点が初期私札の特徴として指摘できる。

第1に、畿内古紙幣はいずれも銀目であり、銭貨建て私札の発行は、これまでのところ確認されていない。しかもほとんどの場合、初期私札は銀1匁（銭80文）以下の小額貨幣として発行されていた。このことはまた、初期私札の発行に際しては、銭貨への交換を伴うことなくそのまま流通する利便性の高い小額の交換手段となるよう工夫されていたことを示唆している。

第2に、畿内古紙幣は、多くの場合、「銀〇匁（分）預」と表面に書かれているように、銀もしくは丁銀の預り証として発行された³⁾。そして、発行元となった有力商人が単独または連帯で兌換責任を負うとともに、私札と銀との兌換に依っており、これが私札の流通力を保障していたと考えられる。

第3に、発行地域は一般に、伊勢地方や大和下市地方あるいは摂津地方など都から遠く離れた商業地に偏っており、これまでのところ、畿内経済の中心地であった京都における初期私札の発行は確認されていない⁴⁾。また、伊勢地方

3) 畿内古紙幣はすべて銀目となっているが、秤量銀貨支払いの最小単位は丁銀1枚＝43匁程度であるため、貨幣との兌換に際しては、ある程度まとまった枚数を基準として兌換が請求されていたのではないと思われる。一方、兌換金額が最小単位に満たないときには、その時々銀銭相場に基づき銭貨で支払われていたと推察される。

や大和地方では、山田羽書あるいは大和下市銀札という私札発行の成功例に触発されるかたちで、その周辺地域でも私札の発行が相次いだ。

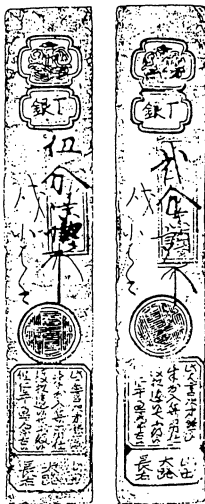
第4に、摂津・和泉・河内系統の私札の場合、大坂江戸堀河銀札や夕雲開銀札（木地屋札）など、当初は大坂城の江戸堀河改削工事、堺郊外百舌鳥村の新田開発といった大規模土木工事遂行に際し必要となる人足費用や食糧購入費用の支払手段として発行が始まった。その後、元和から正保期（1615～48）にかけて大坂の商業の中心地であった平野郷では、商業取引から生じた通貨不足を補うため、市郎兵衛札など有力商人による銀札発行が相次いだ。

もっとも、これら畿内古紙幣と呼ばれる私札がどれだけの人々により貨幣として認識されたうえで交換手段として利用されていたのかという点に関しては必ずしも明らかになっていない。当時における経済や商業取引の発展度合いを考慮すると、私札が貨幣として不特定多数の人々により広く利用されていたとは考え難い。むしろ、有力商人を中心とした商業ネットワーク内部の関係者あるいはその周辺において限定的に流通していたというのが実情ではなかろうか。（形態面からみた私札の類似性）

第1図は、山田羽書、射和羽書、松阪羽書、大和下市銀札など、代表的な畿内古紙幣の写真を掲げたものである。この図をみれば明らかなように、17世紀前半の近畿地方において発行された初期私札の形態はきわめて類似しており、それらに共通の特徴として、① 長径18～22cm、短径3cm前後という短冊形が採用されている、② 表の頭部には、その一般受容性を宗教的権威によって高めるべく七福神や菩薩などの神仏が印刷されている、③ 表の下部には、発行元となった商人の住所・氏名が記載されている、といった点を指摘することができる。この形態面での類似性は、ある特定の私札をモデルとしてその後各地で私札が発行されるに至ったことを示唆している。その先駆けとなったのは、

4) もっとも、朝尾〔1964〕が指摘したように、元和8年（1622）の京都所司代板倉重宗による羽書取引規制の布告自体、京都においても紙幣が流通していた可能性を示しているが⁴⁾、その実態は未だ明らかにされていない。

[山田羽書]
長右銀五分札 長右銀二分札



[射和羽書]
(表面) (裏面)
札野銀一匁札



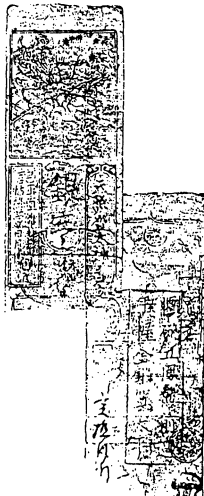
[松阪羽書]
(表面) (裏面)
はかりや銀一匁札



[大和上市銀札]
(表面) 第二分札 (裏面)



[和泉堺木地屋銀札]
(表面) 第一匁札 (裏面)



[摂津伊丹銀札]
(表面) 第一匁札 (裏面)



第1図 初期私札の例

出所：日本銀行調査局『図録日本の貨幣・2』

いうまでもなく、わが国最古の紙幣とされている山田羽書であろう。ちなみに、山田羽書の場合、一般大衆の宗教意識の低さにおもねるかたちで世俗化した山田御師⁵⁾という神職を兼ねた有力商人が発行していたこともあって、現世的な利益を象徴する「福の神」の大黒天が表の頭部に印刷されていた。

このような形態を有する江戸時代に発行された初期私札^{さいふ}を割符など中世の手形類のそれと比較すると、次のような相違点を指摘することができる⁶⁾。すなわち、割符に代表される中世の手形類は、年貢の納入というような特定の当事者間における特定債務の履行手段として利用されることを念頭に置いて登場したこともあって、半紙に貨幣価値の受け渡しを記載した一般文書の域にとどまり、それが貨幣価値の移転手段であることはその文言を読んで初めて認識された。これに対し、山田羽書といった初期私札の場合、そもそも不特定多数の人々による利用を想定の上設計されたという導入の経緯もあって、一見しただけで貨幣であるという認識がえられるよう工夫されていた。実際、私札の形状は取り扱いの容易な短冊形に統一されていたほか、私札の様式・文様についての統一化および額面金額の定額化も図られていた。このように私札は不特定多数の人々がそれが交換手段であることを容易に認証しうるように形態面での定型化、金額面での定額化というイノベーションを伴って登場し、これが私札の交換手段としての流通力を形態面から支えたと思われる。

（山田羽書の貨幣史的意義）

このような考え方に立つと、初期私札の嚆矢である山田羽書の貨幣史上の意義は、紙という媒体を貨幣価値の移転手段として利用することを広く普及させ

5) 山田御師は、平安時代末期に皇室以外の祭祀が禁止されていた伊勢神宮に対する武士などの祈願・奉幣を取り次ぐ祈祷師として下級神官のなかから出現した神職を兼ねる土豪商人であり、彼らは伊勢信仰の布教や伊勢参詣に伴う経済的利益の獲得を目的として日本全国を周遊した。御師はまた、獲得した信者との間で個々に固定的な師壇関係を結ぶとともに各地に信者集団を組織化し、地方信者の伊勢参詣に際しては信者を引率したり、宿舎を提供するなど、各種の便宜を提供していた。

こうした御師の活動実態や、鎌倉、室町、江戸時代等における伊勢信仰のあり方と変遷に関しては、川崎・笠原〔1964〕、内藤〔1976〕、藤谷・直木〔1991〕などを参照。

6) 中世における手形類の発展に関しては、例えば桜井〔1996〕を参照。

ただけにとどまらず、定型化・定額化を通じて紙幣の交換手段としての認証性や流通性を大きく高めたところにあるといえることができる。この場合、問題となるのは、一体誰がどういった事情で、そうしたイノベーションを起こしたかということであろう。この点、文献資料による確認は困難ながら、一部の経済感覚に優れた山田御師が伊勢外宮所在地である伊勢山田での宿泊費や飲食・土産物費用等の支払手段として地方在住の信者向けに、伊勢神宮の神札を模倣して発行した短冊形の金券あるいはクーポン券に起源を求めることができるのではなかろうか⁷⁾。

すなわち、山田御師は、現代流にいうと、神職を兼ねたホテルや土産物屋を経営する旅行者であり、宿屋業が祈祷とならぶ重要な収入源となっていた。そして、彼らは、経済的な利益獲得のため、地方信者による伊勢参詣を促すとともに信者の道中安全を確保する手段として、伊勢神道布教のため訪れた地方において金銀銭貨あるいは米などといった財物との交換で山田羽書という伊勢山田地方においてのみ通用する銀目の金券を発行したと考えられるのである。当時、経済活動と宗教とは密接につながっており、山田羽書の場合、神札の形態を模倣することにより宗教的権威を漂わせ、その交換手段としての通用力を強化しようとしたのではないと思われる⁸⁾。実際、山田羽書は当初、「銀〇匁請取」と表示されていたほか、通用期限も伊勢参詣を促すべく発行後2年と限定されていた。これらの事実、山田羽書が当初、銀目の貨幣的価値の受取証として発行されていたことを窺わせる⁹⁾。

7) 通説（例えば日本銀行調査局〔1975〕では、鶴岡〔1999〕が指摘するように、享和2（1802）年に伊勢外宮の神官である渡会貞多が著した『神鏡秘事談』に基づき、金子の授受に際し出てきた端数（端銀）の額をいつでも現銀に引き換えることを約束したうえで、紙片に書き付けて相手に渡した端書＝約束手形・預かり証であったのが、やがて紙幣としての体裁を整えるに至ったと理解されている。しかし、16世紀末から17世紀初頭における伊勢神宮の経済的地位や山田御師による伊勢講中の開発を考慮すると、通説は200年後の世界における後講釈とも考えられる。

8) ちなみに、日本銀行に現存する最も古い山田羽書は長径22.5cmと長大なものであり、このこと自体、神札を模して作られた可能性を示唆している。その後、元和9年（1623）ごろになると、羽書の大きさは貨幣としての運搬性を考慮のうえ縮小され、長径も18～20cmとなった。

9) 同じころ発行された射和羽書、松坂羽書などといった伊勢古羽書の場合、山田羽書とは異なり、①「銀〇匁預」と記されていたように当初より銀の預り証として発行されていたほか、②通

このほか、山田羽書の場合、川上〔1969〕が見いだした江戸時代初期の史料における「(金) 壺分にて十五枚かふたはかき二枚三枚のこりても、国へ持かへりては、所斗のはかきゆへ、壺文にもならず、先これ遣へとて、不入物もかふ事なり、十人に一人も、はかきが三枚のこりしが、これはうりて錢にせんという者はなし」(近松茂矩輯『昔嘶』第八卷)という記述が示すように、当初は正貨との兌換が認められておらず¹⁰⁾、そのため、山田羽書を携行してきた地方からの参詣者は羽書すべてを土産物などの購入に当てたため、伊勢山田の商業をさらに活発化させるという効果を有していた。加えて、この史料の「壺分にて十五枚かふたはかき」、「国へ持かへりては」という文言は、江戸時代初期、羽書が地方において山田御師から米や金貨等との交換により購入されていたことを示唆しており、前述の山田羽書発生にかかわる本稿での仮説を間接的にせよ支持していると思われる。

その後、長期にわたった政治的混乱が元和2年(1615)における大坂夏の陣により最終的に收拾され、国内政情が安定化したことを背景として、元和期(1615～24)以降、伊勢参詣客が増大傾向をたどり、山田御師による地方信者獲得を目的とした全国周遊の必要性も漸次低下していった。そうしたなかで、御師が地方在住の信者に対し伊勢山田で支払手段として無制限に通用する羽書という金券を発行することも少なくなっていくと思われる。その結果、元和9年(1622)ごろになると、山田羽書は通説が指摘するように伊勢山田における小額貨幣不足を補う支払手段としての性格を名実ともに強め、発行後2年以内という通用制限が撤廃されたほか、額面金額表示も「銀〇匁請取」から「銀〇匁預」に変更されるとともに正貨との兌換が行われるようになったと推測される¹¹⁾。

ゝ用年限が記されていない羽書もみられるなど、羽書の形態が幾分異なっていたが、これらのことも山田羽書で地方で金券として発行されていた可能性を示唆していると考えられる。

10) 日本銀行保有の山田羽書のうち慶長古羽書と呼ばれる慶長年間に発行された羽書の場合、表には「此は〈羽〉書次第銀可渡」と記載されており、銀との兌換の可能性が想起される。しかし、銀兌換が行われていた元和年間(1615～24)に発行された羽書の「此は〈羽〉書次第無異義何時にテモか称〈ね〉渡可申候」という文言とは大きく異なっているため、慶長期に発行された山田羽書の文言は、銀との引き替えで発行されたことを確認する程度の意味しかもっていなかったのではないかと考えられる。

(山田羽書は熊野街道等を経由して他地域にも影響を及ぼす)

加えて、興味深いことには、伊勢山田地方と大和下市とは熊野街道という交通路を通じてつながっているほか、大和下市と堺・大坂は西高野街道や竹之内街道などにより結ばれている。このことはまた、これらの交通路を経由して、伊勢山田地方で発行された私札に関する各種の情報が小額通貨不足に悩んでいた大和下市や堺などに短期間のうちに伝播し、そうした地域においても先行事例にならうかたちで山田羽書に類似した私札が発行されるに至った可能性を示唆している。その後、商業が発展していた摂津国平野郷や河内国八尾などにおいても、作道〔1958〕が指摘したように、地域的な通貨不足あるいは小額貨幣不足を補うものとして大坂、堺、平野郷などの有力商人により発行された私札が流通していた。そして、これら摂津・和泉・河内系統の私札が、江戸時代において藩が発行した地方貨幣として広く流通していた「藩札の原型」(日本銀行調査局〔1973〕)になったとされることが多い¹²⁾。したがって、近世日本における札遣いの隆盛は17世紀前後に伊勢国山田地方において自然発生的に登場した山田羽書にまでさかのぼることができ、ここに山田羽書の経済史的意義があるといえよう。

現在までのところ、現物により確認しうる最古の藩札は寛文元年(1661)に越前国福井藩で発行された福井藩札であり、また近畿地方では寛文2年(1662)に発行された岸和田藩札が最も古いとされる。しかし、渡辺・土井〔1987〕や松本〔1990〕などが指摘したように文献上は寛永7年(1630)の備後福山藩による藩札発行が確認されているほか、荒木〔1969〕は摂津国尼崎藩では同じく寛永14年(1637)ごろに藩札が発行されていた可能性を版本に記された年号銘から示唆している¹³⁾。これらの事実、近畿地方では通説よりも約30年早い段

11) 山田羽書と正貨との兌換は当初、御師が個別に行っていたが、寛文3年(1663)以降、山田に羽書賄店(引替店)が設けられ、5%の交換打歩を徴収のうえ金銀との兌換が行われるようになった。

12) もっとも、これまでのところ、藩札を初めて発行したのは寛文元年(1661)の越前国福井藩であるとされているほか、そうした情報の伝播を裏付ける文献資料が発見されていないため、このような議論が仮説の域を出ていない点是否定しえない。

階から藩札が発行されていた可能性を示している。仮にそうだとすると、私札から藩札へと移行していく過程が文献史的になお明らかになっていないという問題を有しているものの、畿内古紙幣との関連性がより明確になるということができる¹⁴⁾。ただし、こうした立論の妥当性を主張するためには、今後、私札がどのような過程を経て藩札へと変化していったのかとか、武士や領民等は私札と藩札をどのようにして区別していたのかといった点についても分析・検討する必要があるといえよう。

(3) 初期私札発行の背景

（初期私札は撰銭の下での通貨不足への対応措置として発行される）

それでは、私札がなぜ17世紀前半の近畿地方において自律的に登場したのだろうか。17世紀前半のわが国における通貨の流通状況を見ると、金・銀貨という高額貨幣は徳川幕府により発行されたものの、銭貨に関しては引き続き渡来銭が流通していた。渡来銭は12世紀末以降、長年にわたって国内貨幣として利用され続けてきたが、字義どおり造幣権者が日本国内に存していなかったため、その発行量および品質を管理することができなかった。初期私札は、そうしたなかで発生した銭貨の品質低下に伴う撰銭行為の高まりや、その結果として生じた銭貨の流通価値の混乱や通貨不足への対応のため、地域的な交換手段として有力商人により発行され、価値の安定した良質の交換手段を求めている人々によって貨幣として受容されたということができる。

そして、こうした初期私札の場合、発行者および受け取り手双方のニーズに合うかたちで小額の銀目紙幣として発行された。受け取り手からすると、小額面のほうが受領後に交換手段として利用する際の利便性が高かったからである。もっとも、寛文期（1661～74）になると、寛永通宝（文銭）の普及とともに地域

13) このほか、作道〔1958〕は、寛永年間（1624～44）に岸和田藩の春木地方において札遣いがみられたことを指摘している。

14) なお、私札の発行が途絶えた背景は必ずしも明らかにはなっていないが、「藩札と競合するため、藩当局によって差し止められたと考えられるのではないか」（新保 博）という見方が強い。

的な通貨不足も次第に緩和され、そうしたなかで「山田羽書、大和下市銀札のような特殊なものを除いて、大部分の私札が寛文期ごろから姿を消していった」(日本銀行調査局 [1980])とされている。

(銀目選択の背景)

初期私札の場合、先に述べたように比較的小額の銀目預り証として発行されたところに特色がある。とりわけ私札の始まりとされる山田羽書は銀目で発行されており、ここに私札の価値基準が銀となった背景が形成されたということができる。ここでは、なぜ私札が小額の銀目預り証として発行されるに至ったのかについての検討を通じて、その発行・流通の背景を探ることにしたい。

第1は、銀目が選択された事情である。私札は正貨の預り証または兌換紙幣として発行されたものであり、その兌換対象物が価値下落傾向にある錢貨では、たとえ有力商人が発行したとしても、私札の保有者が錢貨の価値下落リスクを負担しなければならないという問題があった。こうした問題を回避するとともに私札の流通性を高めるためには、価値の安定していた金貨あるいは銀を私札の価値基準に採用するのが最も有力かつ現実的な方策であった。しかし、高額貨幣である金貨の価値単位では小額通貨不足を補うために必要とされる貨幣的価値を示しえなかったため、次善的な解として銀目が選択されたのではないかと考えられる。実際、金1両＝錢貨4貫文という公定相場で計算すると、金1分で1貫文、金1朱では250文となるが、当時の金貨である慶長金貨の最低単位は1分金であったため、正貨との兌換を前提とする限り、事実上金貨範疇の私札は発行不可能な状況に置かれていた。

第2は、小額貨幣として私札が発行された事情である。単に有力商人間での通貨不足を補うための貨幣節約手段として私札が発行されたのであれば、むしろ大口額面の貨幣として発行されるほうがより効率的と考えられる。しかしながら、現実には山田羽書のように銀1匁以下の小額額面が選択されたのであった。この背景としては、小額貨幣に対する需要の充足という山田羽書に固有の事情のほか、次のような事情も作用したのではないかと思われる。すなわち、

私札は有力商人により内部貨幣あるいは商業上の必要で発生した負債として発行されるという発行方法を踏まえると、私札の最初の受け取り手は、その後の交換手段としての利用や債権の安全性確保などを考慮のうえ、小額に分割した預り証の発行を希望したと考えられる。地域的に小額貨幣が不足しているのであれば、有力商人の発行した信用力の高い預り証を支払手段として利用しようとする誘因が高いからである。

3 射和・富山札からみた私札の発行・流通状況

前節では、17世紀前半における錢貨の流通状況を考慮に入れつつ、マクロ経済的な観点から私札が発行されるに至った背景を探したが、本節では、そこで提示した仮説の妥当性の検証を兼ねて、伊勢国射和^{いさわ}と地方で発行された射和札のうち、文献資料が残っている富山札^{とみやま}を取りあげ、事例研究的に私札の発行・流通状況を検討する。

(1) 射和の経済的位置づけと富山家の盛衰

（射和の経済的位置づけと私札の発行）

まず最初に、射和の地理的・経済的位置づけについて簡単に議論しよう¹⁵⁾。伊勢国飯野郡（現飯南郡）射和は、伊勢神宮外宮の所在地である山田から高野山に至る紀州熊野街道を西に約20kmほど入った山間の櫛田川左岸に位置する鳥羽藩領の商業地であり、伊勢参詣の人々や近隣^{にう}の丹生で採れた水銀を求める都の商人の往来が絶えなかった。射和は、南勢地方の特産物であった水銀製の「^{かるこ}軽粉」と称される伊勢おしろい、伊勢茶や伊勢木綿の生産・集散地としても有名であるにとどまらず、そうした特産物の販売と呉服の行商によって江戸に進出した富山家をはじめ札野・中嶋・布屋など多くの富豪を輩出したことでも知られている。

15) 射和地方の地理的・経済的位置づけの詳細については、『射和文化史』〔1955〕や吉永〔1962〕などを参照。

これらの富豪は商家であるとともに地主でもあったが、彼らの財産形成に大きく寄与したのは輕粉と呉服の行商であった。室町時代末期、日本に梅毒が伝わりと同時に猛烈な勢いで全国に蔓延したが、その特効薬として輕粉が賞用されたことや、山田御師が外宮での御祓いやお土産に伊勢おしろいを用いたことが射和所在商家における財産形成の基礎となったのである（『射和文化史』〔1955〕）。このように射和は、江戸時代初期においては伊勢山田・松坂などとともに南勢地方を代表する経済の中心地として著名であっただけでなく、富山家の例が示すように、江戸における伊勢商人発祥の地として、越後屋三井家を生んだ松坂と並び称されるほどであった。

そうしたなかで、「日常生活に必要な小額貨幣、特に錢の不足を補填するもの」（吉永〔1962〕）として、あるいは「錢貨運搬の煩を避けるため」（妹尾〔1975〕）に、富山・布屋・札野・中嶋の4家がすでに流通していた山田羽書を範としつつ、射和において銀目の預り札を発行したとされている。これら射和羽書のなかでは布屋羽書が最も古く、元和年間（1615～24）に発行が始まったと推定されている。その後、中嶋札、札野札、富山札が元和期から寛永期のはじめにかけて相次いで発行されたが、17世紀半ば以降、私札の発行は漸次縮小し、宝永4年（1707）の札遣い停止とともに再び発行されることはなかった。私札の発行が縮小していった背景は必ずしも明らかになっていないが、山田羽書や大和下市銀札の例が示すように、私札の発行増大とともに幕府あるいは藩政府が関与してくることはありうる。このため、射和富山札に関しては、これまでのところ、そうした文献資料は発見されていないが、徳川幕府あるいは鳥羽藩が射和羽書発行に関与していた可能性は否定できないといえよう。

（富山家の盛衰）

富山家（屋号は大黒屋）は当初、射和を中心に商業活動に従事していたが、文禄元年（1592）からはその一族が江戸に進出し、江戸では呉服商のほか、両替商も兼営していた¹⁶⁾。大消費都市江戸における富山家の商業活動は旺盛な呉

16) 富山家の商業活動の推移および繁栄と衰退の歴史の詳細については、吉永〔1962〕を参照。

服需要などに支えられるかたちで順調に発展したようであり、そうした繁栄振りを背景として享保10年（1725）には信用力に富む大手両替商から構成される御為替10人組の株を譲り受け、幕府の公金を取り扱うまでに至った。同家による商業活動は、射和、江戸や京都などを営業上の拠点として、呉服の行商のほか、伊勢おしろいの製造・販売、伊勢茶、伊勢綿の販売から酒造にまで及ぶとともに、元和・寛永期から活発化した。そうした商業活動の結果、富山家は元和期から元禄期にかけて漸次資力を拡大し、寛永期前後には射和の富豪という名声をすでに獲得していた。

もっとも、富山家の財力を支えた呉服の販売は、江戸在住の大名領主層を主たる対象としたものであった。このため、正徳期（1711～16）以降の徳川幕府による倭約政策の実施、大名の窮乏化に伴う高級呉服に対する需要の減退などを背景として、富山家は元禄、享保期を頂点にその後は衰退の途をたどり、安永2年（1773）には御為替10人組を脱退するに至った。このように諸大名への呉服販売に売り上げのかなりの部分を依存していた富山家は、越後屋三井家などとは異なり、元禄・宝永期以降の全国的な商品経済の展開の流れに乗れず、衰退の道をたどっていったといえることができる。

第2表は、吉永〔1962〕の研究に基づき、富山家の元和・寛永期（1615～1644）における（純）資産規模の推移および寛永15年（1638）秋における算用帳（貸借対照表）を示したものである。この表からは、富山家の発展および経営内容に関し次の3点がその特徴として指摘できる。第1に、富山家の（純）資産規模は、元和年間（1615～24）は銀目（貫、匁）、寛永期（1624～44）入り後は金貨建て（両）で表示されている。富山家の資産規模評価に際し寛永期以降、金貨建てが選択されたのは、寛永元年（1624）前後から江戸における商業活動が射和でのそれを大きく上回り、経営実態をより適切に把握するためには金貨建てのほうがよいとの判断が働いたものと推察される。このことはまた、射和における富山家の富豪としての名声は江戸での商業活動によって支えられていたことを意味している。

第2表 射和・富山家の財務状況

(1) 江戸初期における富山家の(純)資産額の推移

	(純) 資産額		(純) 資産額
元和元年 (1615)	10貫541匁	寛永5年 (1628)	—
♪ 2年 (1616)	15貫322匁	♪ 6年 (1629)	—
♪ 3年 (1617)	21貫812匁	♪ 7年 (1630)	1300両
♪ 4年 (1618)	24貫 52匁	♪ 8年 (1631)	1319両
♪ 5年 (1619)	24貫 53匁	♪ 9年 (1632)	—
♪ 6年 (1620)	33貫123匁	♪ 10年 (1633)	1012両
♪ 7年 (1621)	41貫479匁	♪ 11年 (1634)	1145両
♪ 8年 (1622)	—	♪ 12年 (1635)	1197両
♪ 9年 (1623)	41貫470匁	♪ 13年 (1636)	1313両
寛永元年 (1624)	56貫486匁	♪ 14年 (1637)	1189両
♪ 2年 (1625)	—	♪ 15年 (1638)	972両
♪ 3年 (1626)	—	♪ 16年 (1639)	829両
♪ 4年 (1627)	—	♪ 17年 (1640)	668両

(2) 寛永15年 (1638) の算用帳

78両1分	他国之分
170両	地廻, 山中質貸共
91両	米, 大豆, 麦, 小麦, 味噌, 酒, こうじ の分有物
35両	有茶分
14両	出入帳分
11両2分	錢綿分
40両	有金
1,144両	計
内	
73両3分	羽書の代
24両	市太預り金
44両	おまん, 機七両人金
30両	若き衆遣金
171両3分	計
差 引	972両1分

出所: 吉永 [1962]

第2に、富山家の（純）資産規模の推移をみると、元和元年（1615）の銀10貫541匁から始まって年を追うごとに増加し、寛永元年（1624）には56貫486匁にまで膨らむなど、10年間で5.6倍の規模に達している。また、元和・寛永期（1615～44）においては寛永7、8年（1630～31）ごろがピークとみられるほか、その背景は不明ながら、寛永17年（1640）にはピーク時の半分近くまで減少していることがわかる。

第3に、寛永15年（1638）秋の算用帳に基づき富山家の商業活動をみると、総資産1,144両のうち江戸、大坂や出羽国酒田向けの商品とそれに関連した前貸金からなる「他国之分」が782両と約7割を占めるなど、寛永15年には富山家の商業活動の中心がすでに江戸、大阪などに移っていたことが財務データ面からも確認された。一方、射和地方での営業活動に関連して、米、大豆、茶、綿などの商品在庫が資産として計上されている。この間、富山札については、負債に「羽書の代」として未償還残高の73両余が計上されている。一方、寛永15年における富山家の純資産残高は972両となっている。両者を比較すれば明らかに、富山家の場合、十分な資産を担保として羽書が発行されており、そうした高い信用力に基づき富山札が射和地方における良質の交換手段として機能しうる背景が形成されていたことが窺われる。

（2）富山札にみる初期私札の発行・流通状況

（富山札は仲買、在地問屋といった中間業者向けに発行される）

先に述べたように、富山家では、豊かな財力を基礎とした経済的信用力の高さを拠り所として、寛永元年（1624）3月より富山札と呼ばれる銀目の預り証を発行していた。この富山札の場合、国文学研究資料館史料館に富山家の「羽書仕入帳」という文献資料が保存されており、これまでも『射和文化史』〔1955〕や吉永〔1962〕などにおいて初期私札研究に利用されている。ちなみに、「羽書仕入帳」は、富山札の額面金額や発行金額が発行のつど記載されているほか、償還残高を控除した流通残高も時折記載されているなど、私札の発

行・流通状況を窺ううえではきわめて貴重な文献であるといえることができる。以下では、この「仕入帳」に記載された諸計数に基づき、改めて富山札の発行・流通状況を検討し、江戸時代初期における私札のあり方を考えることにしたい。

第3表は、「仕入帳」に記載された富山札の発行状況を一覧表に取りまとめたものである。先に述べたように、「仕入帳」に基づく富山札の発行状況についての検討は、これまでも幾度か行われているが、管見の限り、本稿のように「仕入帳」に記された富山札の発行・償還状況を子細に分析のうえ一覧性の高い表に取りまとめた研究はみられなかった。その意味で、ここでの議論は、従来にないものといえることができる。そして、同表からは、発行・流通面からみた富山札の特徴として次の5点が指摘できる。

第1に、富山札の場合、寛永元年(1624)から同15年(1638)にかけて伊勢茶や伊勢木綿の仕入資金あるいは前貸資金というかたちで、最終的には伊勢茶・伊勢木綿の生産主体である小農生産者あての支払手段として発行された¹⁷⁾。この富山札が日常取引において利用可能な支払手段として機能しえなければ、小農生産者によりその受け取りが忌避されるため、富山札は限られた範囲であったにせよ、少なくとも射和地方においては日常取引における支払手段として流通していたと考えられる。こうした事情もあって、富山札の額面金額は山田羽書と同様に銀1匁以下の小額面となっているが、羽書の額面構成割合については明確な規則性を見いだすことができなかった。

もっとも、有力土豪である富山家の場合、小農生産者とは直接取引は行わず、仲買、在地問屋、織元などといった中間業者を介して取引を行うのが一般的であったと思われる。こうした取引事情を反映して、富山家と中間業者との間の

17) 吉永〔1962〕の第2表においては、富山札の発行高と発行残高とが明確に峻別されていないため、明暦2年(1656)まで富山札が発行され続けたと解釈することもできる。本稿では「仕入帳」の「やき申候」という文言を回収羽書の焼却処分と解釈したが、こうした解釈にしたがって発行残高を再計算したところ「仕入帳」のそれとはほぼ一致したことから、富山札の発行は寛永15年で終了したとみなすことにした。

取引は大きな金額となったため、富山札は小額面札を一束ねにした高額札として中間業者あてに発行され、中間業者はこれを細かくばらしたうえで小額札そのものとして小農生産者からの商品集荷の際に代金として支払ったと考えられる。そしてまた、富山札は期中ならして発行されたというよりもむしろ特定の一時期に集中発行されていたことがわかる。実際、寛永元年・2年における羽書の発行総額は合計14貫750匁、総発行額25貫104匁の59%を占めるなど、富山札の発行は寛永元年・2年に集中している。

第2に、富山札の発行期間は前期（寛永元年から7年まで）、後期（同12年から15年まで）の2期間に分けられるとともに、前期が上記の事由から発行額の7割を占める。加えて、富山札の場合、寛永8年から同12年までの間、一時的に発行が途絶えている。この事由は明らかではないが、それはまた、寛永8年に花房志摩守幸次が伊勢山田奉行に就任するとともに山田羽書の発行取り締まりを始めた時期とも符合していることを考えあわせると、私札発行に対する徳川幕府の取り締まり強化を眺め、この時期、富山家も私札の発行を抑制していた可能性が否定できない。さらに富山札は寛永15年（1638）に発行停止となったが、この背景としては、① 寛永10年（1633）に外様の九鬼家に代わって鳥羽藩に入封した譜代の内藤氏が実権を握ると、伊勢山田奉行の方針に呼応するかたちで領内での私札の発行に対し抑制的な態度で臨んだ、② このころになると、山田羽書が射沢にまで浸透し、射沢独自の私札を発行しなければならない事由が後退していった、といった事情を指摘することができる。

第3に、富山札の償還（兌換）も比較的多額にのぼり、前期における平均的な流通残高はおよそ銀5貫目程度と推察される。実際、寛永元年から2年にかけて富山札は大量に発行されたにもかかわらず、発行高14貫750匁のうち約9貫が兌換され、寛永2年の流通残高は5貫750匁にとどまっていたほか、寛永7年（1630）8月には前期に発行された富山札のほとんどが償還されるに至った。

第 3 表 い き わ と み や ま
射和富山

発行年月日／額面	2 匁札 (＝160文)		1 匁札 (＝80文)		9 分 (＝72文)		8 分 (＝64文)		7 分 (＝56文)	
寛永元年 3 月 11～12 日 (1624 年)	100 枚 (200 匁) 全発行枚数比 7 %		1,072 枚 (1 貫 72 匁) 72 %						101 枚 (70 匁 7 分) 7 %	
同 月 13 日										
同 月 16 日			194 枚 (194 匁) 23 %		99 枚 (89 匁 1 分) 11 %		97 枚 (77 匁 6 分) 11 %		83 枚 (58 匁 1 分) 10 %	
同 月 20 日			193 枚 (193 匁) 100 %							
同 月 22 日 第 1 回発行			486 枚 (486 匁) 52 %							
同 月 22 日 第 2 回発行									199 枚 (139 匁 3 分) 32 %	
同 月 28 日			349 枚 (349 匁) 33 %							
4 月 17 日			1,156 枚 (1 貫 156 匁) 56 %							
同 月 19 日										
同 月 22 日			489 枚 (489 匁) 34 %				197 枚 (157 匁 6 分) 13 %		197 枚 (137 匁 9 分) 13 %	
7 月 3 日			1,075 枚 (1 貫 75 匁) 54 %							
同 月 17 日							202 枚 (161 匁 6 分) 29 %		195 枚 (136 匁 5 分) 29 %	
9 月 21 日			496 枚 (496 匁) 31 %						315 枚 (220 匁 5 分) 20 %	
同 月 27 日			1,100 枚 (1 貫 100 匁) 64 %				100 枚 (80 匁) 6 %			
(9 月以降) 17 日			496 枚 (496 匁) 47 %						100 枚 (70 匁) 10 %	
寛永元年中合計発行高	100 枚 200 匁	1 % 2 %	7,106 枚 7 貫 106 匁	39 % 57 %	99 枚 89 匁 1 分	1 % 1 %	596 枚 476 匁 8 分	3 % 4 %	1,190 枚 833 匁	7 % 7 %
寛永 2 年 3 月 16 日 (1625 年)			301 枚 (301 匁) 50 %		100 枚 (90 匁) 17 %					
同 月 29 日										
4 月 26 日			800 枚 (800 匁) 67 %						100 枚 (70 匁) 8 %	
寛永 2 年中合計発行高										
寛永 1・2 年合計発行高 うち償還済 未償還										
寛永 4 年 7 月 23 日 勘定										
寛永 4 年 11 月 6 日 償還 残高										
5 年 2 月 6 日 償還 残高										

札の発行流通状況

6分（＝48文）	5分（＝40文）	4分（＝32文）	3分（＝24文）	2分（＝16文）	発行額総計
	100枚（50匁） 7%		100枚（30匁） 7%		1,473枚 1貫422匁7分
91枚（54匁6分） 16%	387枚（193匁5分） 68%	88枚（35匁2分） 16%			566枚 283匁3分
	88枚（44匁） 10%		208枚（62匁4分） 24%	99枚（19匁8分） 11%	868枚 545匁
					193枚 193匁
	247枚（123匁5分） 26%			201枚（40匁2分） 22%	934枚 649匁7分
	221枚（110匁5分） 36%		194枚（58匁2分） 32%		614枚 308匁
196枚（117匁6分） 19%	222枚（111匁） 21%	175枚（70匁） 17%		100枚（20匁） 10%	1,042枚 667匁6分
	477枚（238匁5分） 23%		125枚（37匁5分） 6%	309枚（61匁8分） 15%	2,067枚 1貫493匁8分
	691枚（345匁5分） 40%		526枚（157匁8分） 31%	496枚（99匁2分） 29%	1,713枚 602匁5分
197枚（118匁2分） 13%	199枚（99匁5分） 14%	188枚（75匁2分） 13%			1,467枚 1貫77匁4分
	923枚（461匁5分） 46%				1,998枚 1貫536匁5分
108枚（64匁8分） 16%	5枚（2匁5分） 1%		166枚（49匁8分） 25%		676枚 415匁2分
	493枚（246匁5分） 31%		293枚（87匁9分） 18%		1,597枚 1貫50匁9分
	400枚（200匁） 24%			100枚（20匁） 6%	1,700枚 1貫400匁
	360枚（180匁） 35%		85枚（25匁5分） 8%		1,041枚 771匁5分
592枚 355匁2分	3% 4,813枚 2貫406匁5分	3% 19% 451枚 180匁4分	9% 4% 1,697枚 509匁1分	7% 2% 1,305枚 261匁	17,949枚 12貫417匁1分
	201枚（100匁5分） 33%				602枚 491匁5分
					札種・枚数不明 842匁
	200枚（100匁） 17%		100枚（30匁） 8%		1,200枚 1貫
					札種・枚数不明 2貫333匁5分
	※8貫目は古羽書で、残り1貫目は損ね羽書				14貫750匁6分 ※9貫 5貫750匁6分
					古種之羽書1貫 新種十二神羽書1貫 3貫750匁6分
					700匁 3貫50匁6分

発行年月日／額面	2匁札（＝160文）	1匁札（＝80文）	9分（＝72文）	8分（＝64文）	7分（＝56文）				
寛永6年2月14日 勘定	注 寛永5年2月からの新規発行分1貫700匁については記述なし								
同月同日 残高	注 古種之羽書10貫を焼却処分								
同月同日 償還 残高	注 寛永6年中に574匁7分 十二神羽書を新規発行								
寛永7年4月25日 発行残高 （1630年）									
同月30日 償還 残高									
5月19日 償還 残高	注 4/30、5/19償還合計の6貫308匁7分（6貫271匁2分+37匁5分）は、6月14日に焼却処分								
8月18日 償還 残高	注 償還分の43匁4分は焼却処分								
寛永12年12月 10日 （1635年）		200枚（200匁） 全発行枚数比32%	30枚（27匁） 5%	50枚（40匁） 9%	50枚（35匁） 9%				
同月 28日		124枚（124匁） 28%	17枚（15匁3分） 4%						
寛永13年1月 29日 （1636年）		200枚（200匁） 37%		48枚（38匁4分） 9%	50枚（35匁） 9%				
3月 1日		472枚（472匁） 45%		11枚（8匁8分） 11%	100枚（70匁） 10%				
寛永13年4月 29日		1,058枚（1,058匁） 57%		95枚（76匁） 5%	99枚（69匁3分） 5%				
寛永14年5月 2日 （1637年）		660枚（660匁） 77%							
6月 13日		493枚（493匁） 45%		99枚（79匁2分） 9%	98枚（68匁6分） 9%				
寛永12年12月10日以来の 新規発行高	0枚 0匁	0% 3,207枚 3貫207匁	50% 65%	47枚 42匁3分	1% 1%	403枚 322匁4分	6% 7%	397枚 277匁9分	6% 6%
なお寛永14年2月5日 同年4月18日 同年11月11日	〔「中羽書」償還〕 「中羽書」は「古羽書」償還後に発行した札か 〔「中羽書」償還〕 〔「中羽書」償還〕								
その他 同年4月13日 発行分		1,000枚（1貫匁） 100%							
同年4月19日 発行分		469枚（469匁） 36%		100枚（80匁） 8%	101枚（70匁7分） 8%				
同年4月25日 発行分		690枚（690匁） 78%							
寛永14年8月吉日勘定ノ									
既存市中残総計									
（日付不明） 償還 残高									
同年8月4日 償還 残高	注 これらは、寛永17（1640）年に焼却処分 注 原資料には6貫400匁とあり（内訳：4貫205匁＝新羽書／1貫941匁4分＝中羽書／253匁6分＝古羽書（十								

6分（＝48匁）	5分（＝40匁）	4分（＝32匁）	3分（＝24匁）	2分（＝16匁）	発行額総計
					4貫750匁6分
					古種之羽書1貫500匁 3貫250匁6分
					十二神羽書 2貫284匁2分 6貫609匁5分
					内訳 十二神羽書4貫192匁4分 古種之羽書2貫417匁1分
					6貫271匁2分 338匁3分
					37匁5分 300匁8分
※これは寛永14年8月以降、新規発行の羽書と共に処分対象					43匁4分 ※ 257匁4分
50枚（30匁） 9%	50枚（25匁） 9%	50枚（20匁） 9%	50枚（15匁） 9%	50枚（10匁） 9%	580枚 402匁
		148枚（59匁2分） 34%	150枚（45匁） 34%		439枚 243匁5分
51枚（30匁6分） 9%	50枚（25匁） 9%			149枚（29匁8分） 27%	548枚 358匁8分
100枚（60匁） 10%	200枚（100匁） 19%		50枚（15匁） 5%		1,033枚 805匁8分
99枚（59匁4分） 5%	267枚（133匁5分） 14%	92枚（36匁8分） 5%	95枚（28匁5分） 5%	83枚（16匁6分） 4%	1,888枚 1貫478匁1分
	200枚（100匁） 23%				860枚 760匁
106枚（63匁6分） 10%		98枚（39匁2分） 9%	100枚（30匁） 9%	97枚（19匁4分） 9%	1,091枚 793匁
406枚 6% 243匁6分 5%	767枚 12% 383匁5分 8%	388枚 6% 155匁2分 3%	445枚 7% 133匁5分 3%	379枚 6% 75匁8分 2%	6,439枚 4貫841匁2分 （原資料記載は4貫441匁2分）
					1貫200匁 700匁 500匁
					1,000枚 1貫匁
100枚（60匁） 8%	200枚（100匁） 16%	100枚（40匁） 8%	99枚（29匁7分） 8%	100枚（20匁） 8%	1,269枚 869匁4分
	191枚（95匁5分） 22%				881枚 785匁5分
※原資料では7貫497匁1分と記載					9,589枚 ※7貫496匁1分
古羽書市中残257匁4分を含む。					※7貫753匁5分
※1匁羽書で焼却処分					※4匁5分 7貫749匁
二神羽書))					1貫350匁 6貫399匁

発行年月日／額面	2 匁札 (=160文)	1 匁札 (=80文)	9 分 (=72文)	8 分 (=64文)	7 分 (=56文)
寛永19年1月時点：残高 (1642年) 償還 残高	注 寛永20年：90匁焼却／同21年：損傷札回収等				
正保3年10月21日 (1646年) 償還 残高	注 焼却処分				
正保3年11月14日 償還 12月6日 償還 12月30日 償還	注 焼却処分 同上 同上				
正保4年3月20日 償還 同月21日 償還 4月23日 償還 残高 7月27日 償還 11月8日 償還 12月16日 償還 残高	同上 同上 同上 注 焼却処分 同上 同上				
慶安元年3月26日 償還 7月28日 償還 (1648年) 残高	注 焼却処分 同上				
慶安2年8月15日 償還 慶安4年7月25日 償還 残高	注 焼却処分 同上				
承応2年7月21日 償還 (1653年) 残高	注 焼却処分				
以下本書最末尾記載事項	2 匁札 (=160文)	1 匁札 (=80匁)	9 分 (=72文)	8 分 (=64文)	7 分 (=56文)
正保3年10月吉日時点で の残高 (1646年)	0 枚 0 % 0 匁 0 %	917枚 26 % 917匁 39 %	0 枚 0 % 0 匁 0 %	475枚 14 % 380匁 16 %	404枚 12 % 282匁 8 分 12 %
うち償還期日別償還額 正保3年11月8日 (1646年) 慶安元年3月26日 (1648年) 同年7月5日 慶安2年8月15日 慶安4年7月25日 承応2年7月21日 (1653年)	注 焼却処分 同上 同上 同上 同上 同上				
合計					
本書最末尾記載事項 2					
正保4年4月吉日 残高 同月同日 償還 承応3年6月18日 償還 (1654年) 明暦元年9月27日 償還 12月吉日 発行 (1655年) 同 2年2月20日 償還 3月29日 償還 4月6日 償還 11月3日 償還	注 焼却処分 同上 同上 注 原資料最末尾に右のように記載。「羽書五百目出し申候但新判但老札は書也」 注 焼却処分 同上 同上 同上				
最終残高					

資料：「富山家元和十年羽書仕入帳」

6 分 (=48文)		5 分 (=40文)		4 分 (=32文)		3 分 (=24文)		2 分 (=16文)		発行額総計	
※原資料には 4 貫462匁 2 分とあり										4 貫600匁 137匁 ※ 4 貫463匁	
※原資料には 2 貫270匁 6 分とあり										2 貫191匁 6 分 ※ 2 貫271匁 4 分	
										670匁 330匁 350匁	
※原資料には650匁 5 分とあり ※原資料には521匁 4 分とあり										100匁 100匁 70匁 ※651匁 4 分 74匁 3 分 32匁 22匁 8 分 ※522匁 3 分	
※原資料には499匁 5 分とあり										16匁 9 分 5 匁 ※500匁 4 分	
										18匁 8 分 7 匁 1 分 474匁 5 分	
										1 匁 4 分 473匁 1 分	
6 分 (=48文)		5 分 (=40文)		4 分 (=32文)		3 分 (=24文)		2 分 (=16文)		発行額総計	
431枚 258匁 6 分	13% 11%	740枚 370匁	22% 15%	220枚 88匁	6 % 4 %	150枚 45匁	4 % 2 %	96枚 19匁 2 分	3 % 1 %	3,433枚 ※ 2 貫330匁 6 分 ※原資料では 2 貫360匁 6 分ま た上記10月21日の記事では 2 貫 270匁 6 分	
										3 匁 3 分 3 匁 1 分 1 匁 4 分 34匁 3 分 67匁 1 貫615匁 3 分	
										1 貫724匁 4 分	
										—	
※うち 1 匁羽書 1,216枚										3 貫576匁 6 分 1 貫794匁 4 分 52匁 5 分 1 貫729匁 7 分 360匁 500匁 1 貫369匁 7 分 294匁 6 分 463匁 3 分 295匁 7 分 117匁 3 分	
										698匁 8 分	

(富山札は正保4年ごろまでにほぼ姿を消した)

第4に、後期の場合、発行額が比較的少なかったにもかかわらず、正保3年(1646)の流通残高が2貫270匁を維持するなど、前期に比べ市中滞留期間が長かったが、正保4年(1647)末には521匁にまで低下するなど、兌換がほぼ完了した。したがって、富山札の場合、初期私札は寛文期(1661~73)ごろから姿を消していったとする通説よりも約20年程度早く、その役割を終えたと解釈できるのではなかろうか。この背景は必ずしも明らかではないが、先にみた徳川幕府による私札取り締まりの強化や、山田羽書の流入により富山家自体が射和において私札を発行しなければならない事由が後退していったといった事情を挙げることができる。

第5に、「仕入帳」に添付された富山札の版本見本刷り(第2図)を子細に観察すると、荒木[1959]がすでに指摘しているように、その裏面には「右羽書之替小判ヲ以相場次第可渡候」あるいは「このはかき以六十六匁小判壹両」という文言が記載されている。この文言からは、富山札が市中相場あるいは金1両=銀66匁という固定相場で金貨と引き替えられていたことが窺われる。小額の銀札として発行された富山札に高額貨幣である金貨との引き替えが明記されていたという事実は相矛盾するかのように見えるが、小額貨幣が恒常的に不足している状況の下で銀札が発行される場合、兌換準備として小額貨幣を十分保有することはそもそも不可能なことといわざるをえない。したがって、富山家にとっては、一定の枚数に束ねられた銀札を対象として金貨と兌換するのが最も現実的な選択肢であったといえることができる。

加えて、浦長瀬[1985a]が指摘したように伊勢国が江戸時代初期より金遣い圏にあったことや、富山家の場合、商業活動が江戸など東国の顧客を主たる取引相手としていたため財産のかかなりの部分が金貨建てとなっていたことなどを考慮すると、銀札の兌換に小判が用いられていたのは、ある意味で当然ともいえる。このように富山札が金兌換となっていたという事実はまた、銀札を受け取った茶や木綿の小生産者は富山札を日常取引に際しての支払手段として利用



第2図 富山札の雛形

出所：「富山家羽書仕入帳」

し、その結果、射和等で商業等を営む少数の人々の手許に集積され、彼らの手によって一束ねにされたうえで高額札として金貨に兌換されたのではないかと考えられる。

(射沢羽書流通量変動の背景)

この点に関連していうと、小額通貨不足への対応措置として発行された銀札

が小額の支払手段として広く流通している限り、正貨との兌換が問題となることはない。したがって、富山札の場合、発行当初は貨幣としての信認がさほど高くはなかったこともあって、先に述べたように、少数の商業者の手許に一旦集積された後、彼ら自身が富の蓄積手段として正貨を選好のうえ富山札の兌換を求めたため、寛永元年から7年にかけては金兌換が急速な勢いで進み、流通残高も大きく減少したといえることができる。これに対し、寛永12年(1635)から15年にかけて発行された富山札は、正保4年(1647)に至るまでの比較的長期の間、平均4貫目程度という残高でもって市中に滞留していた。このことは、支払手段としての山田羽書の定着とともに射沢においても札遣いが漸次広範化し、富山札の射沢での交換手段としての利用が高まっていったことを示唆していると考えられる。

一方、山田羽書の場合、大量の銀貨の海外流出に伴い日本国内における銀貨の流通量が減少傾向をたどるなかで1660年代後半には羽書の銀貨に対する価値が大きく低下した結果、銀兌換に際し求められる打歩(交換手数料)は公定の5%から15~16%にまで拡大し、小判1両に対する山田羽書の価値は銀67~69匁まで下落した。こうした事態に対処すべく、寛文8年(1668)、羽書64匁が金1両と等価で固定され、ここに山田羽書の金札化が図られた。その意味で、伊勢古羽書のなかでも商業取引上の事由で発行された富山札は、山田羽書に先行していち早く寛永年間に事実上の金札化を遂げたといえることができる。この山田羽書の金貨でみた価値下落はまた、山田羽書の発行量増大とともに寛文期(1661~73)に至ると、山田羽書を大量に保有する商業者が台頭してきたことをも意味しており、それがまた、山田羽書の固定相場での金兌換を促したといえることができる。

4 お わ り に

以上、本稿では、17世紀前半に発行された初期私札の流通事情を振り返りつつ、伊勢国射和地方で発行された富山札の発行・流通状況を同家の「羽書仕入

帳」に基づき検討したが、その結果、次に掲げるような事実が判明した。

第1に、江戸時代初期、近畿地方においては撰銭および小額貨幣不足への対応措置として各種の私札が発行され、それが地方通貨としての藩札に繋がっていったが、そうした札遣い隆盛の基礎となったのが伊勢山田羽書の登場を契機として完成した様式の統一化および額面金額の定額化であった。この結果、不特定多数の人々が私札あるいは藩札を貨幣価値の移転手段として容易に認識できるようになり、それがまた紙幣の一般受容性を形態面から支えたと考えられるからである。

第2に、富山札は射和地方における小額貨幣不足を緩和すべく銀目の小額預り証として同家の商業活動のなかで発行され、射和地方における小額の支払手段として機能した。しかし、富山札は発行後まもなく同地における商業家の手許に集積される一方で、彼らが正貨との兌換を相次いで請求したことから、寛永元年・2年に発行された富山札14貫750匁のうち約9貫が同2年末までに金貨に兌換された。寛永8年から12年までの間、富山札の発行が一時途絶えたが、これは徳川幕府による私札発行取り締まり強化に対応したものである可能性が高い。その後、富山札の発行は再開されたが、3年後の寛永15年(1638)に再び発行停止となったほか、正保4年(1647)にはほぼ全額が正貨に兌換され、通説よりも約20年程度早く市中から姿を消した。

第3に、富山札の場合、寛永12年から正保3年に至るまでの約15年間、流通残高は概ね4貫目程度を維持するなど、市中滞留期間が比較的長かった。このことは、支払手段としての山田羽書の定着とともに射和においても札遣いが漸次広範化し、金貨に対する兌換請求が低下していったことを示唆している。また、富山札は山田羽書を範とした小額貨幣として発行されたが、小額貨幣不足に対処すべく正貨との兌換に際しては当初から金貨が利用されていたことが羽書に記された文言から明らかになった。その意味で、富山札は山田羽書に先行して金札化を寛永年間にいち早く遂げたといっても過言ではない。

これらの事実を確認しえたことは、私札の経済史的意義を考えるうえでのひ

とつの大きなステップと考えられるが、残された課題も少なくない。例えば、富山札など山田羽書以外の私札について、実際に貨幣としてどの程度機能していたのか、正貨との引き替えはどのようにして行われていたのか、といった問題が残されている。今後、これらの問題についても、私札関連史料の発掘・読解を通じて検討していくことにしたい。

【参考文献】

- 朝尾直弘「木地屋銀札について」、『日本史研究』第72号，1964年。
- 荒木豊三郎『私札』，いそべ印刷所，1959年。
- 荒木豊三郎『藩札』（改訂三版），いそべ印刷所，1969年。
- 伊勢射和村『射和文化史』，1955年。
- 浦長瀬 隆「16世紀後半西日本における貨幣流通——支払手段の変化を中心として——」，大阪歴史学会『ヒストリア』第106号，1985年4月(a)。
- 浦長瀬 隆「16世紀後半京都における貨幣流通」，『地方史研究』第195号，1985年6月(b)。
- 大蔵省編纂『大日本貨幣史』別巻，1970年。
- 川上 雅「鑄貨・札および手形」，豊田・児玉（編）『流通史1』，山川出版社，1969年。
- 川崎庸之・笠原一男（編）『宗教史』，山川出版社，1964年。
- 作道洋太郎『近世日本貨幣史』，弘文堂，1958年。
- 桜井英治『日本中世の経済構造』，岩波書店，1996年。
- 妹尾守雄「藩札と私札の経済史的意義」，上智大学経済学会『上智経済論集』，第21巻第2，3合併号，1975年。
- 鶴岡実枝子「紙幣の誕生」瀧澤武雄・西脇 康編『日本史小百科〈貨幣〉』，東京堂出版，1999年。
- 内藤湖南『日本文化史研究（下）』，講談社学術文庫，1976年。
- 日本銀行調査局『図録日本の貨幣2：近世幣制の成立』，東洋経済新報社，1973年。
- 日本銀行調査局『図録日本の貨幣6：近世信用貨幣の発達(2)』，東洋経済新報社，1975年。
- 日本銀行調査局「わが国紙幣制度の源流について——とくに伊勢国山田羽書三百年の歩み——」，『調査月報』，1980年2月。
- 速水 融・宮本又郎（編）『経済社会の成立』，岩波書店，1988年。
- 藤谷俊雄・直木孝次郎『伊勢神宮』，新日本出版社，1991年。

松本寿三郎，「熊本藩における藩札の史料収集と研究」，委託研究報告 No. 3 (1)，1990年．

吉永 昭「伊勢商人の研究—近世前期における「富山家」の発展と構造」，史学会『史學雑誌』第71編第3号，1962年．

脇田 修『秀吉の経済感覚』，中央公論社，1991年．

渡辺則文・土井作治，「広島藩，福山藩，三次藩における藩札の史料収集と研究」，委託研究報告 No. 2 (58)，1987年．